
未来を見据えて

燕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来を見据えて

【Nコード】

N2036Y

【作者名】

燕

【あらすじ】

夢を叶う為に今・・・あゆむ・・・。

一、紹介文

— 未来を見据えて —

ルーティン地方のお話です。夢を探す旅にでる少年のお話・・・。

主人公

A g e / 1 6

R a c e / コリンク

N a m e / レント

S e x / ♂

T o n e / 生意気口調

一人称 俺

二人称 君 / お前

— F r i e n d —

A g e / 1 6

R a c e / イーブイ

N a m e / ヒイリ

S e x / ♀

T o n e / 冷静口調

一人称 私

二人称 あんた / 君

レンクと一緒に旅をするのでした〜♪

F r i e n d

A g e / 15

R a c e / ラティアス

N a m e / リーラ

S e x / ♀

T o n e / 無邪気口調

一人称 私

二人称 あなた / 君

レント達とは普通に話しをする。
習慣である。

二、旅の始まり（前書き）

夢を叶うことは苦勞をする事だと・・・。

決して・・・夢を叶うことは簡単ではない・・・

二、旅の始まり

此処ルーティン地方は計16の町がある、その中の一つ、ノーマルタウンで僕らはのんびりと生活をしていたが・・・。

今日、俺は夢を叶える為に旅をする。

俺の夢はまだ秘密だけどだんだん分かって来るからさ♪

・・・おっと、これは失礼しました。
まだ名前を教えてなかったな・・・。

レント「ヒイリー明日俺は夢を叶える為に旅を出る事に決めたよ!」

俺はレント、種族名はコリンク。

ヒイリー「はっ? あんた正気!?!」

こいつはヒイリーで種族名はイーブイ・・・。

ヒイリーと共同生活をしている。

俺達は両親がいないから一緒に暮らしてる・・・。

だが今日で共同生活を終える・・・と言うより一時的にと言うのか?
夢を叶えたら帰るつもりだけどね。

ヒイリー「ダメよ!?! 夢を叶えるって事は町全ての試練をクリアー
しなくちゃならないのよ!?!」

レント「そんぐらいは分かってるよ。」

夢を叶える為にはいくつかの試練を合格しなくてはならない・・・。
最悪の試練の場合は死にいたる場合もあるのだ。

ヒイリー「どうして夢を叶いたいのか!? 死んじゃうかもしれないんだよ!?・・・どうして?」

レント「それは言えないよ。けど俺はその夢を叶うために行くんだ。」

ヒイリー「・・・レント。私は・・・レントを危ない目に会わせたくないよ・・・。」

レント「ゴメン・・・俺は、行くよ。」

ヒイリー「・・・私、もう寝るよ。」

ヒイリーは下を向いて自分の寝場所へと行った。

レント「俺は旅に行くよヒイリー・・・。」

レントも明日の為に早めに寝ることにしたのであった。

そして午前5時30分・・・
まだ辺りは真っ暗だ。

レント「これとこれを持って行くとするかな。」

レントは旅の準備をしていた。朝食も疾づくに食べてあり。
いつでも出発OK・・・。

レント「良し・・・、行くかな。」

レントは旅用のリュックをしょった。
そして待ちかねの旅へとレントは旅立つ。

レント「行ってきた・・・」ヒイリー「待って！」

レントが言う前にヒイリーはレントを呼び止める。

レント「何だよヒイリー止めてもダメだからな？」

ヒイリー「違うわよ！レントだけじゃ心配だから私も行くの！」

レント「・・・えっ!？」

ヒイリーの背中を良く見るとリュックを背負っていた。

ヒイリーは行く気満々だった。

レント「ヒイリー!？」

ヒイリー「レントがダメでも私は付いていく、これは私の勝手だからね!？」レントの為に行かないから・・・。」

ヒイリーは顔を横に向いて顔は赤くなっていた。

レント「・・・勝手にしやがれ!？」

ヒイリーとレントは二匹の旅となったのだった。

三、死を賭けて・・・（前書き）

レント「俺は・・・、お前の悲しむような顔は見たくない・・・。」

三、死を賭けて・・・

俺達はさまざまな試練を挑む事にした・・・。

挑む事は・・・死を賭ける事だと言う事を・・・。

決して簡単ではない試練が俺達に牙を向くだろう
・・・。

だが・・・俺達にとって此処第一試練は死はないと父から教えても
らった・・・。

レント「よし！まず第一試練であるノーマルシティの試練を挑もう
！」

ヒイリー「・・・大丈夫・・・なの？」

レント「ん？何が・・・？」

ヒイリーは不安で一杯だった。

ヒイリー「知ってるでしょ！？試練を挑む事は」

ヒイリー、レント『死を賭ける事・・・。』

ヒイリー「知ってるなら今のうちに止めよう？」

レント「大丈夫だよ♪ヒイリー♪俺にはこの本があるんだ。」

レントは古そうな厚い本を出した。

本の真ん中には『試練と導べ・・・』と書いてあった。

ヒイリー「何？その古いのは・・・。」

レント「これにはいくつかの試練の攻略が書いてあるんだ。」

ヒイリー「攻略？」

『試練と導べ・・・』と言う本は・・・16の試練を攻略されている。

相手の特徴、試練の内容

・・・そして試練の攻略

レント「いろんな事が書いてあるから死はないと思うんだ・・・♪」

レントは本を広げて最初の1ページを読んだ。『最初の試練・・・それは試練を受ける者の実力を試すため・・・』

レント「そう言う風に書いてあるんだ♪だから最初は実力試し・・・死はないと思うし父さんも言ってたから・・・。」

ヒイリー「けど・・・（レントのお父さんと私の母さんは・・・。。）やっぱり！」

レント「俺は言ったことを諦める訳には行かないんだ。」

ヒイリー「私達の親達・・・いや皆、死の試練を失敗してるんだよ！？」

試練を失敗すると言う事は賭けた魂は・・・。二度とこの世界には戻っては・・・こない。

ヒイリーは酷く震えていた。死の試練は絶対にクリアー何て言う事は決してない。

実際に死の試練を完全制覇をした事がないんだから・・・。

レント「大丈夫だ！俺には頭脳があるんだ街一番の天才小僧とも呼ばれてるんだぜ！？俺は頭脳を武器にして死の試練に立ち向かう！」

レントは学園の成績で何度かオール5をとった事がある。

ヒイリー「・・・天才なのは知ってるよ・・・けど！？」

レント「大丈夫！俺達を絶対に導いてくれる！」

ヒイリー「・・・レント。」

ヒイリーは涙で一杯だった。

試練なんかやりたくない

・・・そんな気持ちで一杯だった。

俺達はノーマルシティの中心街へ向かった。

レント「さあ！ノーマルシティ！中心街に着いたぞ！」

街には沢山のノーマルタイプのポケモンが沢山いた。

レント「この街の大きく高い鉄塔の時計台の中にミュウが入るらしいんだ。」

ヒイリー「ミュウが？」

レント「そう！試練を受けるにはこの光石を試練の主に見せるんだ。『光石』を持つ者は試練を受ける者達なんだ。その内の一匹は俺なのさ。」

ヒイリー「光石？・・・ただの石じゃないの？」

レントの持っている光石を見たがただの灰色のした石にしか見えな
いヒイリーだった。

レント「そう思うだろうな・・・。『試練の輝き』を浴びせれば分かるよ。」

ヒイリー「試練の輝き？」

レント「それは試練を行うまで内緒にしておくよ
・・・さっ、鉄塔の時計台に行こう！」

ヒイリー「ああ、待って!？」

第一試練へ・・・!

四、鬼ごっこ!?(前書き)

ミュウ「ぼ、僕は別に退屈だからとか遊んでほしいからとかで第一
試練を

”鬼ごっこ”にしたんじゃないんだからね!?

ねっ!皆、信じてね!」

レント「お前を信じてくれそうな奴は少ないと思うけどな。」

ミュウ「なっ!」

四、鬼ごっこ!?

レントとヒイリーは第一試練である『鉄塔の時計台』に向かった。

レント「着いた! 此処が鉄塔の時計台か! ?」

ヒイリー「此処にミュウが?」

レント「そうだよ。さて時計台の中に入ろうか。」

ヒイリー「うっ、うん。」

時計台の中に入ったレントとヒイリー。

そして時計台の中は螺旋階段だけがあり頂上である真上には大きな鐘があった。

レント「ミュウよ! 第一試練の挑戦を挑みに来た! 挑戦者の証はこの光石だ!」

レントは光石を真上に挙げて挑戦を決行する。

??? 「久しぶりの挑戦者が現れた……。僕の名前は知られてい
る様だね……。」

時計台のあちこちから主の声が響いて聞こえて来る。

ヒイリー「何処に入るの?」

??? 「悪いけど上まで上がってきてくれないかな?」

レント「えっ！？この長い階段を！？」

？？？「そうだよ♪上がりたくないなら試練への挑戦は諦めてもらうけど？」

レント「・・・分かったよ！上がってやろうじゃんか！こんな階段たいしたことない！」

ヒイリー「えっ！？正気なの！この階段数千段ぐらいありそうだよ！？」

鉄塔の時計台の高さは約120メートルもありそんな時計台であり、しかも窓もないから辺りが薄暗くて危ない。

レント「上がってやるよこんなもん！！うおおおおお！！！」

ヒイリー「まっ、待ってよー！」

そして40分・・・

レント「ハア、・・・ハア。やっと着いだあああ・・・。あれ」

レントは頂上まで階段を上がり終えていた。

レント「あれ？ヒイリーは？」

ヒイリー「はあ、はあ。ダメ、・・・こんな長い階段上がる気にならないよ」

ヒイリーは時計台の半分ぐらいで白旗を挙げる感じに座っていた。

レント「おいヒイリー!! 置いてきぼりにしちゃったかあ。・・・
まっ、いつか。」

??? 「良くきたね挑戦者。その根性差を認めてあげる。」

レント「お前がミュウか？」

ミュウ「そう、僕がこの時計台の主でもありノーマルシティの主であるんだよ♪」

レント「そうか……。だが一つお前に言いたい事がある。」

ミュウ「ん? なんだい? (もぐもぐ・・・)」レント「俺が死ぬ気で階段上がって来てたのに! 何を呑気に菓子食っとんじゃああああああ!!」

レントは頭に血が上る程にマジギレをした。

ミュウはポテトチップスやポフィンを食べていた
・・・。

ミュウ「・・・そんなに怒らないでよ? 君も一緒にポテトチップスを食べるかい？」

レント「いらん!」

ミュウ「それじゃあポフィンが良いのかい?」

レント「だからいらないちゅーに!!」

ミュウ「はぁ、君は贅沢だな。」

レント「贅沢な格好しながら食ってるお前に言われたくないんだよ!?!」

ミュウ「・・・むう。お菓子食べちゃいけないの?」

レント「試練を挑戦しに来てるのに普通はダメだろう!? お菓子は!」

ミュウ「・・・むう、ならお菓子がダメならオレンジジュースは?」

レント「それもダメだろ!? せめて終わってからにしろよ!」

ミュウ「・・・もう、君は全く贅沢た・・・。」

レント「贅沢はお前だ!」

ミュウ「そんなに怒るとシワが増えるよ?」

レント「俺はまだならねえよ! てかじじいじゃねえよ!」ミュウ「はぁ、・・・分かったよ。だが認めてあげよう・・・。」

レント「あぁ?」

ミュウ「お菓子を目の前で動じない凄さに認めてあげよう。」

レント「認めんで良い!!」

ミュウ「全く・・・。」

レント「贅沢じゃないからな!？」

ミュウ「さて、そろそろ試練をやってもらいますか。」

レント「鬼ごっこだろう。」

ミュウ「おっ、良く知ってるね? そうだよ。鬼ごっこだよ。つまり僕と遊んでもらいましょうか?」

レント「まさか退屈だから鬼ごっこにした訳じゃないよな?」

ミュウ「そっ、そんな事ないだろう!? そんな訳ないじゃないか! ? (なかなか鋭い挑戦者。)」

レント「・・・ホントか?」

ミュウ「ほっ、ホントだよ! 僕を信じてよ! ?」

レント「・・・。」

ミュウ「・・・。」

二匹は見つめ合った。

ミュウ「信じて?」

レント「信じん!」ヒイリー「はあ、はあ。やっと着いたあゝ。」

ヒイリーは何とか螺旋階段を突破したようだ。

レント「あっ、ヒイリー今頃来たのか?」

ヒイリー「はあ、・・・はあ、うん。それよりレント？この子がミユウ？」

ミユウ「・・・この子だと？」

レント「ああ、この餓鬼がミユウだ。」

ミユウ「・・・餓鬼？」

ヒイリー「あはっ、可愛い！」

ミユウ「可愛い／＼／＼！？そんな事言われても嬉しくないよ！」

レント「ホントは嬉しいくせに。」

ミユウ「なっ、僕は雄だぞ！？可愛いなんて嬉しい訳がないじゃないか！？なっ？挑戦者僕を・・・」レント「信じん！」

ヒイリー「そういえば試練は？」

ミユウ「君なんか嫌いだ！」

レント「どうでも良いわ！！！」

ヒイリー「何？喧嘩？いつの間にそんな仲が良くなったの？」

ミユウ、レント「仲良くない！」

ヒイリー「ハモった・・・。」ミユウ「とにかく！第一試練鬼ごっこを始めるからね！？速く帰ってもらおうからね！」

ヒイリー「上等だ！速く終わらせてあげよ！」

ヒイリー「鬼ごっこ？」

第一試練開幕・・・

五、僕等は鬼！（前書き）

ミュウ「さっさと縁を切るからね！」

レント「言われなくてもそのつもりだ！」

ヒイリー「あんたら、仲が良いのか悪いのか？」

五、僕等は鬼！

—第一試練・・・開幕—

『鬼ごっこ』

ミュウ「君達とは速く縁を切るからね！」

レント「お前とは最初から縁なんかねえよ！さっ、鬼ごっこのルールを教えろ！」

ヒイリー「・・・（仲が良いのか悪いのか・・・。）」

ミュウ「ふん！ルールは君達が鬼で僕は逃げる役時計の針が5（17時）を指した時君達の負け！技も使ってOK！」

レント「ほう。絶対に捕まえてやるよ！」

ヒイリー「貴方の逃げる範囲は？」

ミュウ「決まってるじゃんか！ノーマルシティ全体だよ！」

レント「なっ！この街全部が逃げる範囲だと！？いくら何でも範囲が広すぎるだろ！？」

ミュウ「ならこの試練から引いて下さい♪そっちの方が僕は好都合だ♪ついでに僕は空を飛ぶからね♪飛ぶ高さは二メートル以内にしてあげるよ♪まっ、無理に近いけれど・・・♪」

ヒイリー「・・・（いくら何でも無理に等し過ぎるでしょう！？）」

レント「やってやるよ！やってやろうじゃなか！！お前何か捕まえてやるよ！」

ヒイリー「レント・・・。」

ミュウ「ふん！良いよ、やってみなよ♪それじゃあそろそろ行きま
すか♪位置について♪良い？」

ミュウ、レント『スタート！！』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2036y/>

未来を見据えて

2011年11月4日04時12分発行